

The Buried Giant にみられる両価感情 — 復讐者たちが示す和解の可能性

神 尾 春 香

序論

Kazuo Ishiguro の作品に共通する「記憶」を巡る問いは第一作 *A Pale View of Hills* から *Never Let Me Go* まで中心的なテーマであるが、最新作 *The Buried Giant* (2015) においても重要である。物語では、苦痛や恐怖の記憶を隠蔽することで自己を守ったり、願望を投影させながら過去を捏造する人間の姿が描かれる。「記憶と忘却」の問題は個人のなかにだけでなく、集団や社会のなかにも潜んでいる。この物語の背景にあるのはブリトン人とサクソン人の対立であり、かつてアーサー王がサクソン族を撃退しイギリス全土を統一したが、健忘の霧によってその戦争の記憶は消し去られ、両民族は緊張感を保ちながらも共存していた。しかし霧が晴れたことで凄惨な虐殺の歴史が呼び起こされ、人々は再び戦争へと向かっていく。このような悲惨な歴史を繰り返さないためには、そして平和を維持するためには、過去の記憶を「忘れる」べきだろうか。たしかに忘却に基づく平穏はある。¹ だが一方で、それが特定の権力者や集団によって都合よく操作された、つまり意図的に隠蔽された記憶ならば、権力の正当性を示すための見せ掛けの平和にすぎない。イシグロの着想の原点は、旧ユーゴスラビアの紛争や、ナチスによるユダヤ人迫害、第二次大戦期のフランス、ルワンダ虐殺などの史実にあるといわれており、² 『忘れられた巨人』は、目を背けたいような過去に対して、人や国家はどのように対処すべきかというきわめて今日的な問題を提起している。

物語の結末には曖昧な点が多く残るが、過去の暴力の記憶が新たな暴力を

育むという悲劇のなかに、復讐の連鎖を断ち切る展望を見出すことができるように思われる。これを立証するために、希望をもたらす存在としての3人の復讐者—Axl, Wistan, Edwinの描写に着目しながらテキストを分析し、人や社会が負の記憶にどう臨むべきなのかを考察するのが本論の目的である。

1. 個人的記憶と集合的記憶

『忘れられた巨人』はファンタジーの体裁を取りながら、アーサー王没後まもない頃の英国を舞台にした小説である。イシグロの作品において共通したテーマの一つとなっているのが「記憶」を巡る問題であるが、今作品でも、奇妙な霧のせいで人々の記憶が「おぼろげになり、抑圧され、歪められる」様子が描かれる (Alter)。主人公の老夫婦は、消息不明の息子を探すため、そして自分たちの記憶を取り戻すために旅に出る。物語の最後には、すべての人の記憶がよみがえり、伏せられていた事実が明らかになるのだが、それは果たして望ましいことだったのだろうか、忘却は悪いことばかりではなかったのではないかという問いかけがなされている：“As they progress through an Angela Carter-ish landscape of forbidding plains and hidden tunnels, ... we begin to suspect that the communal amnesia might not be such a bad thing after all.” (Preston)。

イシグロの小説を精神分析の立場から批評する際、しばしば語りや登場人物が持つ「自己否定 (ego-denial)」、「投影 (projection)」、「抑圧 (repression)」などの防衛機制の心理が注目される (Sim 132)。Kakutaniは『忘れられた巨人』では過去との葛藤が“denial, distortion or self-delusion”を通じて表現されていると述べる (Kakutani)。人々は時に、苦痛や恐怖の記憶を隠蔽することで自己を防衛し、願望を投影させながら過去を捏造するが、そうした心理が作中でも見受けられる。

例えば、老夫婦が行方を探す息子は疫病によってすでに他界しているのだが、夫妻はその事実を忘れてしまっている。息子と再会することを心の慰めにしており、「向こうの村で息子が私たちを待っている」(20, 70) と思い込

んでいる。そうしたなか、忘却された記憶がふとした瞬間に表層に現れることがある。Beatrice は修道院の地下トンネルに入って以降「死んだ赤ん坊」の幻影に怯えるようになる (191–193, 310)。この死んだ赤ん坊とは彼女の死んだ息子の暗示である。実は夫婦間の問題が息子の間接的な死因となっているため、ベアトリスが「子供殺し」という罪の意識を抱いているとすれば、その罪悪感の顕在化と解釈することもできる。³

かつてアーサー王に従う騎士だったアクセルは、旅で出会う人々との交流の中で当時の記憶が呼び起こされる。遠い記憶の断片がよみがえる瞬間、「不安や恐怖、興奮、恥の感情」が押し寄せてくるが、彼は時にそうした感情を追い出したり封じ込めようとする：“Axl had felt, almost tangibly, the peculiar mix of comfort, excitement and fear such a movement could bring. Telling himself he would return to these curious sensations at some later point, he shut them out of his mind and concentrated on the scene unfolding before him.” (60)。このように、あえて記憶から遠ざかろうとするように見える。しかし忘れられた記憶は完全に消え去ったわけではなく、頭のどこかに蓄えられていて、記憶の痕跡として残っている。

このような心理は痛ましい記憶によって人間の精神が崩壊しないようにするための一種の自己防衛であり、彼らは無意識のうちに記憶喪失と記憶のすり替えを行なっている。忘却は単に霧という外的要因のみならず、人の心理状態のような内在的要因によっても引き起こることがわかる。

イシグロのこれまでの作品では、主人公の主観的あるいは私的な記憶がテーマとなってきた。『忘れられた巨人』において「記憶と忘却」を巡る問題は、登場人物個人のなかだけでなく、集団や社会のなかにも潜む。社会や集団が共有する記憶、つまり「集団的記憶」⁴ が問題視されているのである。物語の舞台は紀元5世紀頃のブリテン島であり、かつて争っていたブリトン人とサクソン人が和解し、いまや国は平定されて穏やかであると語られる。だが、その平和の裏にある隠蔽された事実が徐々に明るみになっていく。その事実とは、国を統一するために行われたサクソン人大量虐殺の歴史

である。アーサー王はサクソン人からの報復を恐れ、マーリンの魔術を利用して虐殺の史実を隠蔽する。つまり民族間の均衡は魔術がもたらした成果であり、そこにはある特定の権力による政治的隠蔽が関わっていた。これは意図的につくり出された偽りの平和にすぎなかったのだ。

それでも、アーサー王に忠実な騎士ガウェインは王の行いが民族同士の和解を導き、結果として恒久の平和を維持できていると説く(326)。サクソンの戦士であるウイスタンは、それを「虐殺と魔術で成り立った平和」(327)と呼び、悪行をバールで覆っておいて、どうやって償いをするというのか」と糾弾する(137)。このように記憶をめぐる人々は対立を深める。登場人物たちが抱える過去の記憶にまつわる矛盾や葛藤について、以下の章でさらに分析したい。

2. 復讐者が持つ両価感情

イシグロはインタビューの中で、『忘れられた巨人』では人間の「憎しみ」を描いたと述べる。

『忘れられた巨人』は、「社会における記憶」を扱った作品です。人間はいかにして憎しみを作り上げるのかについて書きました。この社会では時として、過去をあえて掘り起こして、今では存在しないはずの憎しみを過去の記憶から新たに作ったり、世代から世代へと伝えていくことがあります。歴史をコントロールすることによって、憎しみが再創出されることあるのか、という問題を描きました。(文藝春秋)

かつてアーサー王は殺戮の史実を覆い隠した(つまり「歴史をコントロール」した)。今度はサクソン側がその過去を掘り起こし、ブリトン人に代わって歴史をコントロールしようとしている。「古い憎しみが国中に広がり」、「土地や征服への欲望」が湧き出るだろう(340)とあるように、憎しみが新たな憎しみを生み、復讐の連鎖となる。そこで本章では、アクセル、ウイスタン、エドウィンという3人の復讐者に焦点を当て、彼らのアンビバレントな

心理を分析したい。

サクソンの戦士ウイスタンにとって、同胞を殺戮したブリトン人への復讐こそが使命である。結末ではサクソン人による侵略の開始が示唆されており、その契機となった人物こそが雌竜を倒したウイスタンなのだが、侵略に関して彼は手放して喜ぶことはできない。

Then to Wistan, he [Axl] said: 'I'm comforted at least, sir, to find you take no delight in these horrors you paint.'

'I'd take delight if I could, Master Axl, for it'll be vengeance justly served. Yet I'm enfeebled by my years among you, and try as I will, a part of me turns from the flames of hatred. It's a weakness shames me, yet I'll soon offer in my place one trained by my own hand, one with a will far cleaner than mine.'

(340)

このように、彼のブリトン人に対する情が完全な憎悪を遠ざけているのである。

ウイスタンは幼い頃ブリトン人兵士によって西の国にある砦に連れて行かれ、ブリトン側の戦士となるよう訓練を受ける。彼以外の砦の訓練生たちはみなブリトン人だったが、共に暮らすうちに、彼らを「本当の兄弟のように愛し始め」る。しかしブレヌス卿をはじめとする仲間から侮辱行為を受け、ブリトン人に愛情を抱くことを恥じるようになる (250)。ブリトン人から受けた一連の仕打ちは、ウイスタンにブリトン人への強い憎しみを抱かせる。

だが彼のブリトン人との思い出は苦いものだけではない。ウイスタンは少年の頃、サクソンの村を訪れた優しく賢いブリトンの騎士に憧れた。老人アクセルにその騎士の面影を見つけ、ウイスタンは喜びで心が踊る (124)。彼はアクセルと賢い騎士が同一人物であるかどうか見極めるために旅に同行し、旅を通じてアクセルの深い人間性をあらためて評価し (212)、やはりあの騎士本人だと信じるようになる。アクセルから「裏切りと虐殺に加担したそのブリトンの騎士に対して復讐したいのか」と問われると、ウイスタンは「彼

が罰せられることを望んだこともあったが、彼にとっては騙すつもりなどなく、両民族のためを思っただけの行為だっかもしれないと今ならわかる」と答える (335)。恨んだ時期もあったが復讐するつもりはなく、むしろ赦しを与えているのである。

ウイスタンは憎しみと復讐心を次の世代へ継承させようとする。自身の後継者としてエドウィンに冷徹な戦士に育て上げることを決意し、自分の代わりに「すべてのブリトン人を憎む」ことをエドウィンに約束させる (277)。エドウィンは母を攫ったブリトン人に復讐しようと思気込むが、彼もまた「すべてのブリトン人を憎む」ことはできない。なぜなら共に旅をした老夫婦との間に友情があるからだ。

‘Master Edwin! We [Axl and Beatrice] both beg this of you. In the days to come, remember us. Remember us and this friendship when you were still a boy.’

As he heard this, something else came back to Edwin: a promise made to the warrior; a duty to hate all Britons. But surely Wistan had not meant to include this gentle couple. (344)

はじめは煩わしかった夫妻の存在が、いつしか彼にとって安らぎとなっていた。特にベアトリスに対しては母親の面影を重ねているような描写もある。

ウイスタンとエドウィンは両者ともブリトン人と生活を共にした経験があり、そこで生まれたブリトン人への尊敬や愛情は消えない。ウイスタンは「幼い頃からブリトン人の良い面を尊敬し、愛してきた」(338)と言う。Paul Ricoeurは「赦しと愛は同族である」(リクール上272)と述べ、また Hannah Arendtが「赦し」を可能にする条件として、「愛」および相手の「人格への尊敬」を挙げていることから (Arendt 241-243)、一部のブリトン人に対するウイスタンとエドウィンの敬慕は、赦しへと繋がるといえるだろう。彼らの中でブリトン人への「親愛の記憶」が生き続けるとすれば、そこに民族和解の希望を見出すことがきるのではないだろうか。

次に、アクセルの持つ復讐心について検証する。アクセルとベアトリス夫婦は仲睦まじく、二人の間には一見すると何の軋轢もないように見えるが、どこか不穏な影が付きまとう。健忘の霧がかかる以前、アクセルとベアトリスの間には確執があった。それはベアトリスの不貞で仲違いし、それが理由で息子が家出したという忌まわしい過去に起因する。アクセルは不貞を働いたに妻に対する「復讐」として、息子の墓参りに行くことを禁じるという罰を与えた。そうした妻への恨みと復讐心は霧によって一度忘却されることになる。二人は愛し合う夫婦としての大切な記憶を取り戻したいと望みつつも、そこには幸福な思い出だけではなく、憂鬱な過去があることに気づき始める。⁵

旅の後半、アクセルはふとした瞬間に、何度かベアトリスへの激しい怒りを感じる。風に煽られながらケルンに向かって歩くベアトリスの姿を見て「駆け寄って庇ってやりたい」という圧倒的な思いのかたわらに、「明らかな怒りと恨み」の感情が湧き上がる(308)。しばらくするとその恨みの影は消え、「ベアトリスを守るという強い衝動」に駆り立てられる：“he was relieved to find in himself no trace of the earlier bitterness. Instead he felt almost overcome by an urge to defend her, not just from the harsh wind, but from something else large and dark even then gathering around them. He rose and hurried to her.”(310)。明記されていないが、アクセルが感じた怒りは過去のベアトリスの不貞に対してのものだと予測できる。こうした情念は健忘の霧でも覆い隠しきれず、妻への深い愛情と庇護欲の陰に記憶の痕跡として留まり続けるのである。

愛と憎しみの起源において、精神科医の Ian D. Suttie は「憎しみは愛情の欲求不満状態である」(79) と考え、愛情は「嫉妬と怒り」と密接な関係を持つと指摘する。愛が大きければ大きいほど、そのフラストレーションによって引き起こされる憎しみはずっと強くなる(サティ 80-82)。したがって、アクセルの妻に対する愛情が深ければ深いほど、裏切られた時の憎しみは増すといえる。また、ウィスタンが砦にいたブリトン人たちに「兄弟同然の」愛情を抱けば、裏切られた際にその愛情と同等の憎しみが湧いてくるの

だ。

3人の復讐者が共通して持つのは「愛と憎悪」の感情である。アクセルが抱く妻への愛情の中には憎しみが混在している。それでも彼は長い年月が徐々に恨みを癒し、黒い影 (black shadows) 自体も愛情全体の一部であると認識するに至る (358)。また、ウイスタンとエドウィンにはブリトン人に対する強い憎悪があるにもかかわらず、わずかに残る愛情や、特定のブリトン人への敬意が彼らの復讐心を鈍らせる。これらは愛情が憎しみを緩和させること、愛情が赦しをもたらすことの証拠となる。

アクセル、ウイスタン、エドウィンは復讐者である以外にも共通点がある。それは、彼らは民族間の境域を行き来する「越境者」でもあるということだ。ウイスタンは幼少期にブリトン人に囲まれて育ち、ブリトンの言語や習慣を学ぶ。ブリトンの村を離れサクソン族の戦士になった後もその習性は身についたままであり、特にブリトン人から教わった剣術の腕前を誇りにしている。そして憎しみの対象であるはずのブリトン人夫妻に協力し、交流を図る。エドウィンは、幼い頃より力の強い子供たちから暴力を受けたり、鬼の嘔み跡が残ったことで身内からも忌避されるなど、自分が育ったサクソンの村で疎まれる存在である。その後、アクセル夫婦の旅に同行し、旅先で夫妻の優しさに触れる。彼らはコミュニティの周縁にいるために、外の人間、つまり他者に思いを馳せることができると考えられないだろうか。例えば、ウイスタンはアクセルをブリトン人一括りの枠に当てはめるのではなく、「ひとり的人格を持った人間」とみなし、思慕する。彼らは境界に属しているからこそ、自民族の内だけでは見えない視点を持っているのだといえる。

アクセルに関していえば、夫婦揃って村の中で差別的な扱いを受け、共同体の周縁に位置することが小説の前半で語られる：“this elderly couple lived on the outer fringes of the warren (5)” “Had they always lived like this, just the two of them, at the periphery of the community? (7)”。これより以前、アーサー王に仕えていた当時のアクセルは二つの民族間に協定を結ばせ平和に導き、サクソン人からも「平和の騎士」として歓迎を受ける。彼は正式な

調停役として、一時的ではあるが異民族に和解をもたらしたのだ。ウイスタンとエドウィンは本意ではなくとも民族間の橋渡し役を担っており、敵対者への情を持ち合わせる。三者の共通点は、民族の垣根を超えて、相手への理解と共感があること、⁶ 民族間の交流を通じて愛の記憶を得たことである。こうした彼らの存在は、無知による復讐へ歯止めをかける役割を果たすかもしれない、暗い結末の先に見える希望となりうると考えられる。

3. 赦しの困難さと和解の展望

物語のラストでは埋葬された記憶が呼び覚まされ、争いが再び始まることを予感させる。ウイスタンの予言通り、怒りと復讐心を想起したサクソン族が「復讐に倒れた同志の復讐のため」(411)に戦い、「罰せられないままできた悪行への償い」をさせるためにブリトン人を殺戮するだろう。憎しみの連鎖は途切れることなく、むしろ強化される(243)。「復讐への欲望」と、悪事を「罰したいという欲求」は人間が持つ根源的な欲望であり、解消することは難しい。アクセルの心の奥底にも、「罰したいという欲望」と「復讐を望む」気持ちが潜んでいたため、妻を恨み続け、酷い仕打ちをした。

'It was just foolishness and pride. And whatever else lurks in the depths of a man's heart. Perhaps it was a craving to punish, sir. I spoke and acted forgiveness, yet kept locked through long years some small chamber in my heart that yearned for vengeance. A petty and black thing I did her, and my son also.' ... 'And I think now it's no single thing changed my heart, but it was gradually won back by the years shared between us. ... A wound that healed slowly, but heal it did. For there was a morning not long ago, ... I watched my wife still asleep though the sun already lit our chamber. And I knew the last of the darkness had left me.' (357)

二人で共有した年月の積み重ねが徐々に傷を癒し、アクセルの中にある「闇」が「去った」のはごく最近のことだった。このエピソードは、いかに

赦すことが難しいか、復讐心を抑えることが困難であるかを物語っている。

テキストでは悪行を隠蔽し、責任から逃れることへの批判が示されている。その一方で、忘却作用のおかげで争いに伴う心の傷が癒えたり、一時的であったとしても平穏が保たれる例が提示されている。⁷ この矛盾に際して、人や社会は記憶にどう臨むべきなのだろうか。その答えの一端は登場人物の言動からうかがうことができるように思われる。最終章にて船頭から夫婦の絆の強さを問われた際、アクセルは敢えて夫婦の暗い過去を打ち明ける(355-358)。黙秘する選択肢があったにもかかわらず、まるで過去の罪を懺悔するかのように。つまり彼は醜い真実を隠蔽するのではなく、身に背負うことを選んだのだ。中嶋氏は「イシグロの主人公たちは皆、過去の出来事を回想し、それについて語ることで、時に自分を偽り、時に事実から目を背けながらも、最終的には過去に折り合いをつけ、受け入れ難い現実にも向き合っていく。」と指摘する(中嶋 77)。『忘れられた巨人』の主人公アクセルも同様に、時に「事実から目をそむけながらも」、最後には自身の罪を明らかにし、「過去に折り合いをつけ」たといえる。ベアトリスだけが死者の世界である「島」に渡り、アクセルは現世に独り取り残されるが、その姿から絶望感は感じられない。体内や目に「炎を宿し」「先へ進んで行く」様子からは何らかの強い意志を感じる。彼は最愛の妻との死別を受け入れ、これから起こる戦いという現実に向き合っていくと読み取ることもできる。

ベアトリスは夫婦の間に暗い過去があったとしても、記憶を取り戻すことを望んだ：“Axl and I would remember our life together, whatever its shape, for it's been a thing dear to us.” (180) “I'll not have us hide. No, I'll not, Axl, and aren't you the same? Let's see freely the path we've come together, whether it's in dark or mellow sun.” (322)。そして彼らは互いを傷つけ合い、復讐を経て、それでも長い年月をかけ共有した時間とそこで育まれた愛が復讐心を癒した。長柄氏は、アクセルとベアトリスが否定的な過去を乗り越えるだけの愛を育んできたとすれば「互いの努力によって、愛が過去の暗い記憶を『相殺する』ことは可能だといえるのかもしれない」(143)と述べてい

る。憎悪の感情の根深さ、和解の難しさが説かれるなかで、やはり「愛」の記憶が和解に繋がると考えられるのだ。

ただし、結末で描かれる夫婦の最後のシーンを見ると、彼らが完全に和解したかどうかは曖昧なままである。アクセルとベアトリスは、船頭から「特別に苦痛をもたらす記憶は何か」と尋ねられると、それぞれに「息子のこと」と告げている。

'You ask for a memory brings particular pain. What else can I [Axl] say, boatman, than it's of our son, almost grown when we last saw him, but who left us before a beard was on his face. It was after some quarrel and only to a nearby village, and I thought it a matter of days before he returned.'

'Your wife spoke of the same, friend,' I [the boatman] tell him. 'And she said she's to blame for his leaving.'

'If she convicts herself for the first part of it, there's plenty to lay at my door for the next. For it's true there was a small moment she was unfaithful to me. It may be, boatman, I did something to drive her to the arms of another. ... [O]ur son was witness to its bitterness, and at an age too old to be fooled with soft words, yet too young to know the many strange ways of our hearts. He left vowing never to return, and was still away from us when she and I were happily reunited.'

'This part your wife told me. And how soon after came news of your good son taken by the plague swept the country. ...' (355 – 356)

このように、彼らは息子の死の真相を思い出し、互いに責めを負っている。したがって、相互に過去の真実と向き合うことで、船頭を介して両者には和解に近い共感が交わされたともいえる。けれども、そこには完全な和解とは言い切れない憂いが潜んでいる。

'... But why blame yourself for it? A plague sent by God or the devil, but what fault lies with you for it?'

I [Axl] forbade her to go to his grave, boatman. A cruel thing. She wished

us to go together to where he rested, but I wouldn't have it. ...'

'Ah, so that's it,' I [the boatman] say. 'That part your wife was shy to reveal.
So it was you stopped her visiting his grave.'

'A cruel thing I did, sir. And a darker betrayal than the small infidelity
cuckolded me a month or two.' (356)

ここで船頭から「息子さんの死になぜあなたが責任を感じるのか」と問われ、アクセルは息子の墓参りを禁じたことを告白するが、ベアトリスの方はそれを打ち明けることを「ためらった」のである。やはり、二人の間に何らかの痼りが残り、第三者である船頭からもその影が見えることは明らかなのだ。しかしながら、世の争い事において全ての遺恨が消え去ることはまず不可能で、解決には何かしらの妥協が伴う。アクセルが「黒い影自体も愛情全体の一部」だと言っていることから、夫婦の姿には現実味が感じられる。

また、この夫婦の生涯から「争いから和解」の一種のプロセスを見ることが出来る。紛争後の社会的和解についての専門家である Priscilla Hayner によると、和解について考えることは、何年ものあいだ生活に入り込んでいた心理的な障壁を克服するプロセスについて考えることを意味しており、和解とは一回起性の出来事ではない。和解に対してどれだけ前向きになるかということは、過去についての知識とどのように向き合い、消化するかという点にかかっていると述べる（ヘイナー 209）。つまり、ゴールとしての和解よりも、そのプロセスに関与することが重要だと考えられる。民族や夫婦間における完全な赦しと和解は描かれていないにしろ、『忘れられた巨人』は和解のプロセス自体を提示している。これに大きな意味があるのではないだろうか。

結論

『忘れられた巨人』において、物語は一定の距離を置いて語られているように感じられ、この小説が示す姿勢、あるいは作者の見解を正確に読み取ることは難しい。人や国家が記憶とどう向き合うべきなのか、その答えは明示

的ではない。だが、精読することで推し量ることはできる。過去を掘り起こすことは憎しみの連鎖を生む可能性があり、一概に良いとは言えない。それでも、過去に向き合うことなしに赦しは得られない。たとえ苦い過去であろうとも、記憶と向き合うことが和解への一歩となるのである。したがって、この物語は「記憶の再構成の場」それ自体を描いたものだといえるだろう。

注

- 1 Nietzsche は忘却することは幸福の必要条件であると述べる。“the smallest and with the greatest good fortune, happiness becomes happiness in the same way: through forgetting or, to express the matter in a more scholarly fashion, through the capacity, for as long as the happiness lasts, to sense things unhistorically.” (“On the Uses and Disadvantages of History for Life”)
- 2 Alter はイシグロがホロコーストや現代の紛争からインスピレーション受けたと述べる：“Before Mr. Ishiguro got around to talking about the inspiration for “The Buried Giant,” he digressed for nearly an hour about France after the Nazi occupation, modern-day Bosnia and Japan, and other places that seemed like possible settings for the novel at one point. ... He considered setting it in post-World War II France, or in contemporary Bosnia, America or Japan.” (Alter)。また、Preston は『忘れられた巨人』にジェノサイドの歴史が反映されていると指摘する：“We can view the “buried giant” as the way history has been swept over any number of genocides, from Armenia to Rwanda.” (Preston)。
- 3 ガウェインは敵対するサクソンの幼子たちを殺した過去があり、赤ん坊殺し (slaughterer of babes) への負い目があるため、この場面ではベアトリスに責められているように感じる。
- 4 集合的記憶に関しては、提唱者である Maurice Halbwachs の著書に詳しい。
- 5 ある時、ベアトリスは独りぼっちで部屋に取り残された夜の記憶を思い出す。彼女は当時アクセルが若く美しい別の女性と浮気していたと主張するが、実際に不義を働いたのはベアトリスの方であったことが後に示唆される。ここでも不都合から逃れたい願望が記憶の捏造を引き起こしたと考えられる。
- 6 Max Scheler は『共感の本質と諸形態』で「共感」の問題を考察している。「心的感情、まして精神的感情は... 歴史的な、また民族的な壁を、否、人間的な壁さえも超えて、了解し、共感」できるものもあるとする (100)。共感については、他にも Smith の『道徳感情論』や、Rousseau の『人間不平等起源論』を参照されたい。両者とも、人間の本性のひとつに他者への関心・同情を挙げている。
- 7 「包括的恩赦、意識的忘却」を志向した時、人権侵害の加害者は不処罰のまま、被害者は見捨てられたままといった不正義状態を維持・継続することになる。一方で「埋もれた記憶の、発掘、訴追、処罰」という厳しい選択肢を選んだ場合、社会的亀裂を深

め、内戦の再発や旧体制派によるクーデターなどを誘発し、社会再建から逆に遠く危険性が生じることになる。(土佐 84)

参考文献

Alter, Alexandra. "For Kazuo Ishiguro, 'The Buried Giant' Is a Departure." *The New York Times*, February 19, 2015.

<https://www.nytimes.com/2015/02/20/books/for-kazuo-ishiguro-the-buried-giant-is-a-departure.html>

Arendt, Hannah. *The Origins of Totalitarianism*. Chicago: University of Chicago Press, 1998.

Ishiguro, Kazuo. *The Buried Giant*. London: Faber and Faber, 2015. (『忘れられた巨人』.

土屋政雄訳. 早川書房, 2015.)

Kakutani, Michiko. "Review: In 'The Buried Giant,' Ishiguro Revisits Memory and Denial." *The New York Times*, February 23, 2015.

<https://www.nytimes.com/2015/02/24/books/review-in-the-buried-giant-ishiguro-revisits-memory-and-denial.html>

Nietzsche, Friedrich. "On the Uses and Disadvantages of History for Life." *Untimely Meditations*. Translated by Ian Johnstone.

<http://www.leudat.com/library/On%20the%20Use%20and%20Abuse%20of%20History.pdf>

Preston, Alex. "The Buried Giant by Kazuo Ishiguro – review: 'Game of Thrones with a conscience'." *The Guardian*, March 1, 2015.

<https://www.theguardian.com/books/2015/mar/01/the-buried-giant-kazuo-ishiguro-review-game-of-thrones-conscience>

Sim, Wai-chew. *Kazuo Ishiguro*. London and New York: Routledge, 2010.

アルヴァックス, モーリス. 『集合的記憶』. 小関藤一郎訳. 行路社, 1999.

サティ, アイアン・D. 『愛憎の起源』. 國分康孝, 細井八重子, 國分久子, 吉田博子訳. 黎明書房, 2000.

シェーラー, マックス. 『シェーラー著作集 8—同情の本質と諸形式』. 青木茂, 小林茂訳. 東京: 白水社, 1977.

スミス, アダム. 『道徳感情論 上・下』. 水田洋訳. 岩波書店, 2003.

土佐弘之. 「移行期における正義 (transitional justice) 再考—過去の人権侵害と復習 / 赦し, 記憶 / 忘却の政治—」. 2004.

<https://ci.nii.ac.jp/els/contents110004633730.pdf?pid=ART0007347884>

中嶋彩佳. 「カズオ・イシグロの小説における翻訳の名残」. 『ユリイカ』2017年12月号, 77-85.

長柄裕美. 「『愛は死を相殺することができる』のか—『忘れられた巨人』から『わたしを離さないで』を振り返る」. 『カズオ・イシグロの視線—記憶・想像・郷愁』. 莊中孝之, 三村尚央, 森川慎也編. 作品社, 2018. 135-156.

文藝春秋編集部 「綾瀬はるか、カズオイシグロに会いに行く #後編」. 『文藝春秋』. 10.7.2017. <http://bunshun.jp/articles/-/4427?page=3>

ヘイナー, プリシラ・B. 『語りえぬ真実』. 阿部利洋訳. 平凡社, 2006.

- リクール, ポール. 『記憶・歴史・忘却 上・下』. 久米博訳. 新曜社, 2004, 2005.
———. 『正義をこえて—公正の探求1』. 久米博訳. 法政大学出版局, 2007.
ルソー, ジャン=ジャック. 『人間不平等起源論』. 中山元訳. 光文社, 2007.

